



リステラス星圏史略
古資料ファイル
7-2-0



(サキ @ 幼年期)

(発掘作業宙)

霧樹里守 is 土岐真扉

(草稿 & 没原稿)

(草稿 & 没原稿)

2007年4月7日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\)](#)

あははっ。あはは。

ほほほほほほ……

ただ一面の草原（くさはら）の中、秋の日の草の実草の穂かきわけて、二歳と半のサキはあちらへ走り、こちらへ走りして、追いかけてくるサエム夫人の手からひょい、ひょいと上手に体をかわしながら、いまだ音程のそろいきらない幼い声で、鬼さんこちらを歌っていた。

「かーさま、こちら、おーにさん、こっちら。かーさまこちら、おーにさんこっちらっ！」

サエム夫人はと言えば、絹のハンカチで上手に目隠しをして、少し身をかがめるようにサキの頭ほどの高さに腕を伸ばし、透けるほどのきゃしゃな白い指先をひらひらとさせながら、美しい灰色の部屋着のすそが風になびいて、早いや麦わら色になり始めた草々に打たれてゆくまま、それはまるでそのまま空気の精でもあるかのように、さらさらと流れて、サキの後を追ってゆくのだった。

サキはそんなかあさまをすごく美しいと思い、それで少し走っていったら後ろを振り向いて、ぴよんぴよんと前かがみにはねながら、ひじから腕をぴったり胸につけるようにして、小さなあごのすぐ下の所で、あの子供独特のリズムのとりかたで、ぱあんぱん、と手をたたいた。

ぱあん ぱん。 かあさまこっち

ぱあん ぱん。 かあさま、追っかけてきて！

ぱあん ぱん。 ぱあん ぱん。

サキの手の指が右や左やすぐ後ろで鳴るたびに、サエム夫人は驚くほどの素速さと正確さで愛する娘のサキの方へ手を伸ばすのだが、いよいよとなるとサキはひょいと地面にすわりこんでは、その手の下をくぐりぬけてしまう。

それで、このゲームはさっきから終りもなく続けられているのだった。

ぱあんぱん。ほほほほほ。

ぱあんぱん。あはは、ほほほ。

そこは金糸色の草原の中、どこまでも続く二人だけの世界だった。

遠くからサユリが、この世界の中に入って行けずに、草原の端に立って呼んでいた。

「サキ、だめよ。母さんは心臓が悪いんだから。

母さん、母さん、また発作が起きるわよっ！」

発作という言葉聞いて、サエム夫人はあきらかに不快の色を示して立ちどまった。

淡い金色の世界はこわされてしまったのだ。

現実の世界で、彼女は、あと数年、いや悪くすればこの瞬間にも停止するかもしれないと医師に保障された心臓を背負って、愛する家族に迷惑をかけながら暮している。

サキも発作と聞いて、なんとなくはしゃぐのをやめた。

サエム夫人はいまいましげにハンカチーフをほどいて、のろのろと家へ向って歩きだした。

体が急に重くなったようで、足を動かすのがおっくうだった。

サキがちょこまかとかけよってきて、長い部屋着のすそにまとわりついた。

「ね……お話聞かせて。おはなしい！」

はねるように元気な娘の体の暖かさを感じて、サエム夫人の重いほおはようやく少しばかりなごんだ。

「ええ、そうねサキ。お話してあげましょうね……」

仲よく寄りそって歩く背中を、サユリが、彼女に似合わぬ激しさで見送っていたことに、二人はついに気がつかなかった。

× × ×

新暦 3年 10月 2日

二人種の邂逅より四年の歳月が過ぎ、新時代の娘、サキに関するマス・コミュニケーションの関心もようやく薄れてきたようです。

二歳半から始めた、幼児教育過程も、日頃私とともに家にいる時間の長いせいもあり、本人も好きでやっていて、あと半年もあれば修了させてしまうことができるでしょう。

母親の欲目を抜きにしても、通常3～5歳の三年間で修めるべきことを、

(未完)

2007年4月8日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\)](#)

エスパッション・シリーズ 第一巻

「サキ・幼ない頃」

~~—わたしは小さい頃からひどく変わった子供だった。~~

~~もっとも、今でもよく友人達から……あなたって変わってるのねエ……とジト目で言われているのだけれど、そのわたしから見ても、昔のわたしの風変わりさはたいしたものだ。~~

—あれは、いくつの頃だったろう。

人間は死期が近づくと幼ない頃を思い出すと言うけれど、わたしは最近、二人の女の子が母親とつれだって海辺を歩いている夢を見るようになった。

それはわたしの記憶の中でも一番古いものの一つで、二人の女の子は姉さんとわたしだった。

あれはわたしが3歳、ねえさんが9歳の時。

ねえさんの舞踊専門学校（バリエ・スクール）の発表会の帰りに、会場のそばの遊歩道をわたしたちは歩いていた。

たぶん、わたしが始めて舞踊（バリエ）に関心を持ったのもこの時だったのだと思う。

始めて見た本物の舞踊（バリエ）と、表彰式の時に最年少受賞者のねえさんといっしょに写真にとられたことで、わたしはすっかり興奮して普段の倍もはしゃいだ。

冬の終りのやわらかい光が遊歩道のまわりの白樺林の中で笑っていて、あつらえてもらったばかりのよそいきが暑苦しくらいだったのを覚えている。

通りが終る所に白い石段があって、そこを降りるとぷんと潮の香が鼻をつく、波の静かな磯浜があった。

大型のロケットバスが、沖合のかなたに光っている白い人工海上都市（マリンドームシティ）から飛び発った。

碧（みどり）や青や所によっては銀色の小さな淵のあいだを探し歩いて、海に来るといつもやるように光っている小石や、確か寶貝という名だったと思うけれど大きいのも小さいのをポケットいっぱいにつめこんでいると、不意に岩の向うからかあさんとサユリ姉さんの言い争い声が聞こえてきた。

二人は、わたしが遊びながら遠くへ行ったと思っていたのだろう。

わたしはなぜだか出て行ってはいけないような気がして岩かげで息をひそめていた。

ショックだった。

まだ自分と母さんと父さんと姉さんだけが世界の大部分を占めていた頃で、わたしには年の近い友達もいなかったし姉さんとは年が離れていたから、自分でかんしゃくをおこしてあたりちらす以外、

(未完)

たぶん姉さんの9歳の時の、舞踊の発表会の帰りだろう。

[『 \(The LORD of the Rings\) \(2\) 』 \(@中学2年以降。\)](#)

2007年4月10日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\)](#)

——3歳、海辺。

なんの時だったか忘れた。たぶん姉さんの9歳の時の、舞踊の発表会の帰りだろう。

「……母さん！ わたしを見てよ！」

波打ち際で遊んでいたサキの心に、不意に母とサユリの言い争う声が聞こえてきた。

その時までは、世界は、ただ愛と慈しみと、優しさだけを持ってサキを迎え入れていたのに。

「今日はわたしの日よ！ わたしが踊ったのよ！ なのになぜ母さんは、いつもいつもいまでも、サキ、サキの話ばかり」

母はただ謝罪した。

人間として、自分の欠点を許して欲しい。あなたはあまりにも幼ない日の私に似ていて、まるで自分の悪い点をそっくり受けついでしまっているのです。私にはあなたが、何を考え何を見て、どう成長するのか、手に取るようにわかってしまう。

あなたは私の愚かさをそのまま再現したようで、時として私には耐え難い。その点サキは……

ふっと視線をはずして、空の一点にサエムは何を見ていたのだろう。

彼女は、サキが「我々とはまったく違う」人間になるだろうと、その未知性に母として人間として、魅（ひ）かれてしまうのだと言った。

サユリが何故そんなに苦しんでいるのか、そのわけもすべてわかるとも。

——サキには、わからなかった。「何か」大事な点を見落としている。

「わかったわ。母さんはわたしを愛してくれてはいないのね。」

冷たく、冷たく、冷たく、サユリは言い放った。 (※)

9歳にして、母親の愛を求める娘という役割を断念し、彼女は一人の女として、サエムとの戦いを開始したのだ。

「これだけは言っておくわ。……サキに、舞踊の道を選ばせないでね。あの子には才能があるわ。——もし、サキと、舞台の上でまで争わなければならなくなったら、わたし、耐えられない。

」

——ああ、なぜ二人は岩かげにサキのいることに気づかなかったのだろう。

その日すぐにサエムは発作を起こして入院し、サキは初めての「幻想」の驚きで、長い間この日の事を忘れていた。

いや、覚えてはられない抑圧となって、彼女自身が無意識のうちに、記憶の底に封じ込めていたのだ。

それが、再び現実となってサキの世界に戻って来たのは6歳の早春。母サエムが遂に逝ってしま

った時だった。

「サキならまだしも並の女の子が9歳でこんな事、言うかねえ アムロだって15だったぞ May.19
」という姉からのチャチャが書き込んであり、

「返信；サユリが並の女の子であるわけがないでしょ〜！」と、反論？が書いてある…… (^◇^;)」

（＊「サユリ16歳」という但し書きのレオタード姿の憂い顔の半身イラストあり、姉が「26歳
とゆーても通るわ、この表情★」とかウルサク書き込んでいる……★(¯^¯;)★

ええ。ハンパに優秀な「姉」と、
天然で規格外な「妹」（私）の葛藤……つーネタは、
まんま実話（実体験）が、下敷きに決まっていますとも!! (-_-;>"

たぶんサキはその、一生のうちでも最も古い記憶を、死ぬまで忘れることはないだろう
(@中学2年以降。)

『 (The LORD of the Rings) (4) 』 (@中学2年以降。)

2007年4月12日 連載 (2周目・地球統一～ESPA)

たぶんサキはその、一生のうちでも最も古い記憶を、死ぬまで忘れることはないだろう。

サユリの前から逃げだしてきたその足で、サキは川べりの土手から砂利を水面につかみたたきつけていた。

ざっとつかむ、ぶんと腕ごと放り出す、石が跳ぶ。

10個、20個とまとめて空を切っていくうちのいくつかは、毎回きまっておかしな飛び方をした。自然な放物線をえがかず、定規をあてたようにまっすぐ、他の石をたたき、追い落としながら直進すると、あるていど行った所から不意に、ほとんど垂直に落下するのだ。

どうやらサキが興奮すればするほど落下開始点が遅くなるようだが、サキは、学校で力学から相対性理論までもマスターしているにもかかわらず、別段その奇妙さには気がつかなかった。

ただ、投げている。

彼女は熱心に投げる事にだけ専心しようとした。

つかんで、投げる、つかんで投げる。

とうとう春の川べりのサキの右手のあたりだけ、砂利がうすくなって湿った砂地が出てきてしまった。

「ツァッ！」

サキはまたもや舌うちして、少し上の草地に身を投げだした。

頭上はるか、かたむき始めた陽の光の空のどこかで雲雀が鳴いている。

サキは心を落ちつけて「いつもの幻想」の中に溶けこもうとしたが、あまりに自分の中味の人間臭さが鼻について、ひばりのように空の中には飛びこめなかった。

サキは目をつぶった。

涙があふれ流れてくるのを止められなかった。

始めて空高く心を飛ばしたのは3歳の時。

姉さんの心の中にある、どろどろしたものが、なんとはなしにただ恐ろしくて哀しくて、母がその時期再々入院を繰り返していたからかもしれない、その頃住んでいた、人家一つない高原の、お花畑の真ただ中で、大地にくるまって火がついたように救いを求めて泣き叫んだことがある。

その時はまだ何も知らなかったから、ただ純粹に悲しかっただけ、ひとしきり泣いた後には、気がつくとも母から教わった古い古い、「本当の幸福になれるよう願う」呪文の唄を、いざまづいて唄っていた。

その時、——サキ自身にはよくわからない——一陣の突風か光かが吹いてきたように感じると、次の瞬間に彼女は、どこだか大宇宙の涯（は）ての、涯（は）ての、一番はずれからとびだして、おび

ただしい数の“魂”の流れを見た。

後で父が倒れているサキを見つけた時、死んでいるのかと思ったという。

サキが母——もう逝ってしまったサエム——にこの「幻想」のことを打ちあける気になったのは、まる一年たった4歳の秋。

母は以前から知っていたようにうなずいて、12歳になったら読むようにと、古い伝承の本を一冊くれた。

そうして、それから母が死ぬまでの2年間、サエムは折にふれてはサキに、心を澄ませ腹をすえて、そうしたいと思う時に見たい所へ心を「飛ばせる」術を教えてくれた。

サエムは——サキがくれを「空想」とか「幻覚」と呼ぶたびに、とまどうような悲しいような、幽かにあいまいな微笑をうかべるのだった。

いつしかサキは寝入っていた。

いや、寝入ったのはサキの体が、だろう。

思考に没頭するあまり、サキはしばしば自分の体の世話をするのを放りだしてしまう。

死んだように横たわって空虚（うつろ）に空を見あげたまま、見る人が見れば、サキの瞳の中をサユリと、生前のサエムの姿が交錯してゆくのが見えたかもしれない。

サキは、幼ない頃からの思い出を全てひっくりかえして、母の一言一言、姉の一挙一動の中から、自分自身への解答を見出そうとした。

サキはサエムの病状を知らされていなかった。

[『 \(The LORD of the Rings\) \(3\) 』 \(@中学2年以降。\)](#)

2007年4月11日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\) コメント \(1\)](#)

——サキはサエムの病状を知らされていなかった。

自分が生まれた時の様子も、母の死に至る先天性疾患の事も。

だから母が床についていない日には、いつでも散歩や鬼ごっこや、母さまお得意の「古いお話」をせがんだ。

そして更に決定的だったのは——「幻想」。

生まれつきその能力が備っているサキと違って、サエムはとても弱かった。 (※)

それでも最後の病の床から、サエムはせがまれるままに「幻想」を思い通りにあやつる方法を教えた。

そして——サエムが冷たく眠りについたその朝、何も知らずに起きだしてきたサキにむかってサユリは、あなたが母さんを殺したのだと、たたきつけるように叫んだのだった。

すっかり笑わなくなったサキが、正式にバレエ学校に入学したのはそれから間もなくの事だった。

基礎はできていたから、習い始めるとすぐに群を抜いて上達し、なにかをふっきるように打ちこんで、いつか子役としてのサユリ・ランの妹サキは、姉の水のような叙情性とは違った、激しい人間性で将来をうわさされるまでになった。

意外にも、サキをバレエの道に入れたのはサユリ自身だった。

罪滅ぼしの気もあったのかも知れない。

母の死後1ヶ月もして、思い出深い家を去り、現在のユアミ市郊外に引っ越してから後、サユリは心を閉ざしたままのサキを気にかけて、誠心誠意面倒を見た。

思えば彼女がその時12歳。現在のサキと同じ。

母親の死で動転して、自分でも思いもかけない事を口走ってしまう事もあつたらう。

サユリが、ある意味でサキを憎んでいたのは確かだった。

けれどそこがサキの不思議な所で、血のつながりだけではない、どんな人間でも、サキを心底あげて憎むことなどできなかった。

とりたてて美点があるというわけでなく、後年、やはりその同じ事がサキの身の上に悲劇をもたらすのだが、憎んで憎み切れない心の不安定さが、サキの誕生以来、母の死ぬその日まで、サユリの心をおびやかしつつづけたことは確かだった。

だからむしろ、サエムの死はサユリに安息をもたらした。

始めのうちこそ、純粹にサキを愛するという感情にとまどってぎごちなくはしていたものの、引

っ越しによって完全に母から逃れでると、一切の邪念はサユリから離れていった。

サキは、年と、いつも年齢以下に見られる外見に似合わぬ、実に鋭敏な感受性と理解力の持ち主だったから、この時も、最初の衝撃から覚めると徐々に姉の意思をを理解し、半年もたつ頃にはようやく生来の明るさをとりもどした。

が、それは周囲の人間が見るように、もとに戻った、あるいは前より元気になったというわけではなかった。

サキは人生の裏表を見るようになり、自分がどう振るまい、何をすれば他人はどう考えるのか、無意識のうちに頭のすみで計算するようになった。

秘かに自分の出生時の事を調べ、一人になるとサキは、どうしても深い方、深い方と自分の、人間の、本質的な問をかきわけていった。

そして——生まれて始めて人間の不条理さに気づいた日から2年。

8歳の 春 に、サキは大好きだったバレエを捨てた。

それは、確かに、子供の未経験さから来る思い込み、ということはあったかもしれない。

それだからこそ、迷いつづけて答えをだした後には、ひたむきな一途さで打ちこんだ。 (※)

「何が弱かったのか主語入れた方がいいんじゃない？」

「平仮名の「る」と感じの「子」が見分けつかんぞ」

「ひたむきな一途さって重複じゃない？馬から落馬したとか小さな小人とか」May.19...

... (by姉)

姉、キライっ★ (^ ^);(^ ^);(^ ^);(^ ^);(^ ^);

コメント



りす

2007年5月4日2:34

.....ていうか、15～6歳？で、こんな文章（物語）を

書いてる自分が、ワタシャ恐い..... | | | (^◇^;) | | |”

ココロを病むわけだよ.....★<(-_-;)>★""""""

地域別教育期間中は、虚弱体質とか特別な理由がない限り、その地区内で初等課の教育を受けるのが普通になっている。

[『 \(The LORD of the Rings\) \(5\) 』 \(@中学2年以降。\)](#)

2007年4月13日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\)](#)

地域別教育期間中は、虚弱体質とか特別な理由がない限り、その地区内で初等課の教育を受けるのが普通になっている。

サキもまた例外ではなく、バレエを習うようになってからは、午前中は地区の学校で体育実技以外の普通授業を受け、午後にはユアミ市内の別の地区の、星立舞踊団（テラ・バリエナス）附属学校へ通って、バレエ始め古今東西のありとあらゆる舞踊を基礎からたたきこまれた。

サキは踊る事が好きだったし、周囲も彼女に期待していた。

舞踊団の人間はだれもかも、サキが12歳になったら舞踊実技を選択し、姉サユリがそうであるように、大御所のだれかの内弟子になって、義務教育課程が終わりしだい職業舞踊手になるのだろうと思っていた。

が、サキはそうしなかった。

彼女は、地域別教育終了と共に行われる、頭脳ランクによる進学校ふりわけにおいて、地球系星間連邦ずいーの英才をもって誇るアロウ・スクール編入を希望したのだ。

正に驚天動地。

サユリを始めとして、バレエ界の教師たちはこぞってサキの才能をなげきおしみ、また、本当に秋を知らない人々は、気でもふれたかとあざわらった。

いや、アロウ・スクールどまりならばまだよい。

サキの最終目的は、リスタルラーナ星間連合の、最高教育機関S・S・Sへの留学資格を得る事だったのだ。

地球系星人何十億かのうち、サキと同じ年にアロウ・スクール編入を志さず者約一億。そのうち運よく合格する者1000名。交換留学生の枠は……60名。

さして勉強していなくて、どの科目もまあ中の上から上上までとれるサキにしてみても、針の先ほどもない可能性だ。

が、サキは、とにかくはげみにはげんで勉強して、ついになぜかアロウ・スクールに合格してしまった。

あとはまあとにかくがんばって、来年の資格審査試験1000分の60に喰いこむべく努力するしかない。

たとえまわりの人間全てがどんな反応を示そうと、

(未完)

1

2

3家庭

4 教育

5 期間

6初等

7 教育

8 期間

9 (入試) 資格

10 基本科 (ファーツアロウ)

11 (SSS)

12 (実・応)

13高等

14 教育

15 期間

16 (実・応)

17

(現在9歳、あと一と月足らずで10歳になろうというサキ)

[『 \(The LORD of the Rings\) \(6\) 』 \(@中学2年以降。\)](#)

2007年4月14日 [連載 \(2周目・地球統一～ESPA\)](#)

家族構成

父 リーオ・アークトゥールス＝ラン 39歳

地球（テラ）本星厚生省所属、民生に関する行政勤務。

~~過去、極東地区代表として地球系星間連邦議会議員三回。~~

(サキにとっちゃ空気が水みたいなもん)

母 サエム・ラン＝アークトゥールス（死亡・39歳）

言語、及び、神話民俗学者。

姉 サユリ・ラン＝アークトゥールス 15歳

地球（テラ）星連立 舞踊学校（バリエナス）所属。職業舞踊手。

現在9歳、あと一と月足らずで10歳になろうというサキは、いつものくせでツァツァツァッと舌打ちして、

「あー、なんてへたくそな字だろ！」

と、ぼやきつつ、それでもせつせと、入学手続きの書類の中に入っていた身上調査書に書き込んでいた。

頃は初春。

ユアミ市外縁部のこのあたりでは、すでに傾き始めた西陽がゆらゆらとかげろうを舞わせていて、閉めきった部屋の中ではむしろ汗ばんでくるくらいだ。

サキは行儀の悪いことに、器用に足の指で窓を押し開けて、最後の一行を書きあげると、窓わくの上に引っ越して声をあげて読みなおした。

「名前、サキ・ラン＝アークトゥールス。女子。9歳。生年月日SP元年4月3日。本籍地……アジア・極東地区北列島……あ、ここ間違ってる。」

サキは書きなおしながら、ふっと手をやすめて、はるか窓の向うを見やった。

下書きが終わったらやはり姉さんのところへ持って行かねばならないだろう。

彼女の字は公の文書を書くには幼稚すぎるのだ。

それでも、やっぱり、せっかく受験地獄(!?)——もっとも彼女は好きでファーツアロウを受けたのだから試験勉強も楽しかったが——をくぐり抜けて入学資格を手に入れたことでもあるし、サキはこれを機会に、ずっと母親代わりだった姉の管（監）理下から完全に独立してしまいたか

った。

いや、それよりも何よりも、サキには最近のサユリ姉さんがわからない、いや、わかりたくない。

不信に陥っていると言っていいだろう。

そんな姉に対して自分がどう思っているのかさえはっきり捕めていなかったから、できる事なら近寄りたくなかった。

……が、書類も下書きは全部終わってしまい、明後日にはその書類をたずさえて入学式に赴くのだ。

サキはすぐに、思い切りよく立ちあがり、階下へ行ってくったくなく姉さんにたの……もうとは思ったが、実際にやったのはぶっきらぼうに書類の束をつき出して、

「これ、明日までに清書して。」

つまりは必要最低限外の口は一切きかずに、逃げだしてしまったのだ。

サユリはもうせんからと同じ深い悩みの瞳をして、ただうなずいてうけとっただけだった。

——サキが、実のところ、サユリが何を悩んでいるのかわかっていることを、当のサキ自身が一番良く知っていた。

事の次第もなにもかも。

しかし、彼女のその分裂した想いを是認することは、つまりは自分の存在を否定する事になる——と、サキは固く思い込んでいる。

9歳という年齢に不相応な程の鋭い感受性と洞察力を見につけてしまっているサキは、年齢から来る未経験さで、まだ、人を思いやるゆとりというものは持っていなかった。

本当に、サキにはわかっていたのだ。

サユリの心の中に、平静の彼女のサキに対する態度からはおよそ考えもつかない葛藤が渦巻いている事を知ったのは、まだたった3歳の時だった。

物心つくかつかぬかの頃だったのに、その時の事ばかりは、わからないままにサキの心に“世界”に対する最初の不安として長く留められている。

「.....でも、ねえ、ヘレナ。好きでも憎んでいなけりゃ自分を保てなくなる時もあるし
。

『 (The LORD of the Rings) (1) 』 (@中学2年以降。)

2007年4月9日 連載 (2周目・地球統一～ESPA)

「.....でも、ねえ、ヘレナ。好きでも憎んでいなけりゃ
自分を保てなくなる時もあるし——。

「憎んでてもどうしても憎み切れなくて、愛しちゃって、
サンドイッチになってつぶれちゃう人だって、いるんだよ。」

Jrr.tolkien's

“The LORD of the Rings”

(c)1978 Tolkien Enterprises.

.....の、映画館で上映直後に買った!! 大学ノートを使用☆

中学2年で、『指輪物語』の米国製? 劇場アニメ版を見て、
「自分は絵描き (漫画家) は無理だ! 文字書き (小説家) に、
なるぞっ!!」と、将来の焦点を絞ってしまった瞬間から、

.....大量~~~~に!! 「下書き」を書き散らしていた頃.....☆

(^◇^;)”

(設定資料)

(設定資料)

【リ】 ※ ほとんど同じ音に聞こえる。

※ ほとんど同じ音に聞こえる。しいて表記を分けるなら、

リ° 固有・スタルラーナ

リ 限定・スタルラーナ

リ” 一般・スタルラーナ

ディ 包括・スタルラーナ ...に、なるだろうか。

それぞれ、首都、首都惑星、首都恒星系、そして、星間連邦国家、となる。

語源は、古語の『リ・スタル・アールラーナ』（"麗わしき我らが天地よ!"）という呼びかけと
いうか祈りの一句である。

咲子は、その建国序文を "美し野、うましき大地..." と擬古文調に翻訳して、自由可題で優を取
った。

星間連邦国家、リスタルラーナ。

地球系連盟人の、第一遭遇。

有史以来の起源を異にする、彼らは異種族である。

※ ディスタルラーナ共通言語における規模または権限の大小等を説明する4つの接頭辞。

L i s : 固有（極小）

__ l s : 限定（小）

R i s : 一般（中）

D i s : 包括（大）

は、実際には他星系人の聴覚・発声器官には殆ど識別のつけがたい類似の音であるが、本書で
は混乱を避ける為、あえて表記上の区別をつけた。

(参照したければ資料)

<http://85358.diarynote.jp/201703032034422721/>

※1 ディスタルラーナ共通言語における規模または権限の大小等を説明する4つの接頭辞。

2017年3月3日 リステラス星圏史略 (創作)

(借景資料集)

リステラス星圏史略
古資料ファイル
7-2-0
(サキ @ 幼年期)

<http://p.booklog.jp/book/112758>

著者：霧樹里守 is 土岐真扉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masatotoki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/112758>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト